２０２１年度
大学院奨励研究員研究報告書

2022年　3月　31日

関西学院大学学長　殿

奨励研究員

氏　　名	上田 紗津貴　　印

指導教員

所属・職名	文学部・教授
氏　　名	佐藤 寛　　印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	日本文化適合版摂食障害予防プログラムの開発とその有効性
採用期間	２０２１年　４月　１日　～　２０２２年　３月　３１日

研究科委員長･研究科長印	事務局印

提出先：　所属研究科事務室

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	栗林 千聡・武部 匡也・上田 紗津貴・Eric Stice・佐藤 寛	論文題目	Eating Disorder Diagnostic Screen-DSM-5 version日本語版の作成およびDSM-5に基づく大学生の摂食障害の有病率推定		
	雑誌名	心身医学		巻号	発行年月	掲載頁
				61巻4号	2021年5月	p. 354-363

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目		
	書名			発行年月	頁
					総頁：
					担当箇所：

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	The European Association for Behavioural and Cognitive Therapies 2021 Congress	開催地	Belfast, Northern Ireland (ハイブリッド開催，オンライン参加)
題目	Dissonance-based eating disorder prevention intervention for Japanese female university students: A feasibility study (ポスター)	発表年月日	2021年9月8日-11日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（３０００字程度）

この度は，大学院奨励研究員としてご採用いただき，誠にありがとうございました。ご支援を賜り，研究活動により専念することができました。関係者の皆様に，重ねて御礼申し上げます。

研究の概要

本研究の目的は，女子大学生を対象として，日本文化に適合した摂食障害予防プログラムを開発し，有効性を検討することである。これまでの研究経過として，不協和理論に基づく介入（Dissonance-based intervention: DBI）に関する摂食障害予防のアセスメントを展望し（研究1），介入の効果測定に必要な尺度の日本語版を作成した（研究2）。そして，日本の女子大学生を対象に，DBIの理論的背景である食行動異常の二過程モデルを検討した（研究3）。次に，従来版プログラムの有効性を検討した（研究4）。さらに，従来版を改良した日本文化適合版プログラムを開発するための予備的介入を実施し（研究5-1），予備的介入に基づく文化適合版プログラムの有効性を検討した（研究5-2）。これまでの研究から，日本文化適合版プログラムが開発された。今後の研究計画として，従来版と日本文化適合版のプログラムの比較試験を予定している（研究6）。

研究経過

研究1　摂食障害予防のアセスメントに関する展望

研究1では，①海外でDBI について用いられているアセスメント尺度の展望，②その中で日本語版として用いることができる尺度の整理を行い，それらを踏まえて今後の摂食障害予防研究に向けた議論を行うことを目的とした。これにより，DBIの効果測定に必要な尺度が明らかになった。

【文献情報】上田 紗津貴・佐藤 寛（2020）. 摂食障害予防のアセスメントに関する展望：認知的不協和理論に基づく介入に焦点を当てて 人文論究，*70*(1), 103-123.

研究2　Ideal-Body Stereotype Scale-Revised日本語版の作成

研究2では，Ideal-Body Stereotype Scale-Revised (IBSS-R) の日本語版を作成し，信頼性と妥当性を検討することを目的とした。女子大学生372名を対象に質問紙調査を実施した。探索的因子分析の結果，原版と同様に8項目1因子が抽出された。確認的因子分析の結果，十分な適合度が確認された。内的一貫性および再検査信頼性も十分な値を示した。Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-4日本語版の下位尺度である痩身理想の内面化とは中程度の正の相関，筋肉質理想の内面化とは無相関を示し，IBSS-R日本語版の収束的妥当性および弁別的妥当性が示唆された。これにより，DBIの効果測定に必要な尺度の日本語版が揃った。

【文献情報】上田 紗津貴・栗林 千聡・武部 匡也・山宮 裕子・Eric Stice・佐藤 寛（2020）. Ideal-Body Stereotype Scale-Revised日本語版の作成および信頼性と妥当性の検討 認知療法研究，*13*, 173-181.

研究3　日本の女子大学生における食行動異常の二過程モデルの検討

食行動異常の二過程モデルは，DBIの理論的背景となるモデルである。研究3では，日本の女子大学生における二過程モデルの妥当性を検討することを目的とした。女子大学生590名を対象に質問紙調査を実施した。構造方程式モデリングを用いた分析の結果，二過程モデルで示されているパスは全て有意であり，モデルの適合度も十分な値を示した。このことから，二過程モデルが日本の女子大学生においても成り立つことが示唆された。一方で，日本の女子大学生の特徴として，痩身プレッシャーの影響が強いことが示された。(学会発表済み，論文投稿中)

研究4　日本の女子大学生における従来版プログラムの効果検討

文化適合版プログラムの開発に向けて，まずは従来版プログラムの有効性を検討した。研究4の目的は，日本の女子大学生に対する摂食障害予防として，DBIの有効性を検討することであった。DBIは，痩身理想の内面化をターゲットとしている。女子大学生12名を対象に介入を実施した。参加者は，痩身理想の内面化，自己像不満，摂食障害症状が介入前から介入後において改善し，フォローアップにかけて改善効果が維持された。このことから，日本においてもDBIが有効である可能性が示唆された。一方，日本において特徴的な影響のみられた痩身プレッシャーについては，改善が認められなかった。

【文献情報】上田 紗津貴・竹森 啓子・稲岡 優衣葉・中山 明日花・佐藤 寛（2021）. 日本の女子大学生に対する不協和理論に基づく摂食障害の予防的介入の前後比較試験 関西学院大学心理科学実践，*2*, 9-13.

研究5-1　文化適合版プログラム開発のための予備的介入

研究5-1では，研究3の結果に基づいて予備的介入（痩身プレッシャーに焦点化した介入）を開発し，有効性を検討することを目的とした。女子大学生8名を対象に介入を実施した。その結果，痩身プレッシャーおよび摂食障害症状に改善が認められた。(学会発表済み)

研究5-2　文化適合版プログラムの前後比較試験

研究5-2では，研究5-1で開発した介入を組み込んだ文化適合版プログラムを開発し，有効性を検討することを目的とした。女子大学生6名を対象に介入を実施した。その結果，痩身理想の内面化，痩身プレッシャー，摂食障害症状に改善が認められた。

今後の研究計画

研究6　従来版と文化適合版のプログラムの比較試験

これまでの研究から文化適合版プログラムが開発されたが,まだ従来版と文化適合版のプログラムの直接比較はできていない。そこで，研究6として，従来版と日本文化適合版のプログラムの比較試験を行うことを計画している。研究6については，既に「関西学院大学人を対象とする行動学系研究倫理委員会」から承認を受けており，実施の準備が整っている。一方，新型コロナウイルス感染症の影響が長引く可能性を視野に入れ，オンラインによる介入も検討している。